

## ～ セピア色の風景 ～

## 「柱時計」

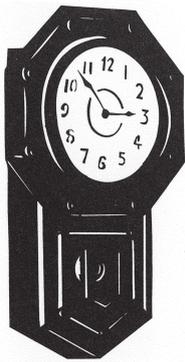
青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

昔の風景で欠かせないものの一つが、大黒柱に掛かった柱時計です。家にいる限り、一日を刻むのはこれでした。当然ゼンマイの時計でしたから、終盤のその緩みからくる時刻の遅れは、生活では織り込み済みでした。とはいえ、ガンと時を打つ前のジーツという音がやけに長くなると（こういう状況になると、やつと鳴ったガンも情けない音でした）、ゼンマイを巻くしかありませんでした。

巻くのは大体父親で、時計は高いところにあるので、大黒足踏みミシンの木製いすに上がってやってみました。振り子の下あたりに入れてあるゼンマイ巻きの鍵を、文字盤の8と4の脇の穴に突っ込み、それぞれ反対方向に巻きました。巻き終わると次は、時刻

合わせです。とはいっても長針をぐるぐる回して、はいつ、というわけにはいきませんでした。柱時計が時刻を知らせる音は、12回まで1回ずつ増えるように打つ設計にしかなくてなく、時刻を合わせるときは、長針をぐるると1回まわして音を鳴らせ、またぐるって1回まわして、というやり方で今の時刻に針をもつていくしかありませんでした。だから、あまりに先の時刻にしなればならない場合は、針が止まった時刻まで、時計を止めておくこともあり



ました。ゼンマイを巻いても、振り子を振らなければ、時計は進みませんでしたから。

子どものころは、柱時計ははるか高いところにある故に興味深いものでした。父親に肩車してもらって、目の前で柱時計を見られ、触れられるときはうれしいもので、肩車の時間はあつという間に過ぎてしまいました。目の前に現れた文字盤は、思った以上に大きく、じつと見ていると長針が動くのが分かりました。思えば、時というものを動くもので実感した最初だったかもしれない。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める